学会ウェブサイト：http://joha.jp　　2024 年 2 月 27 日

ＪＯＨＡニューズレター

第 45 号

日本オーラル・ヒストリー学会第 21 回大会（JOHA21）報告特集

日本オーラル・ヒストリー学会第 20 回大会(JOHA20)が 2023 年 11 月 11 日（土)・12 日(日)に琉球大学を開催校としてハイブリッド開催されました。

今回のニューズレターでは、会員のみなさまに、この JOHA21 のご報告をするとともに、学会誌 20 号の原稿募集についてお知らせします。また、第 22 回大会の日程は 2024 年 9 月 14 日（土)・15 日（日)、会場は青森県観光物産館アスパムを予定しています。プログラムの詳細は未定ですが、自由報告部会も予定しています。エントリー募集などについては、改めてメーリングリストや 学会 HP 上でお知らせいたします。

【目次】

Ⅰ．日本オーラル・ヒストリー学会　第 21 回大会報告

1. 大会を終えて　・・・・2
2. 会長企画ワークショップ「地域とメディア：語りを伝え、残すこと」　・・・・2
3. シンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか――実践的な身振りに目をとめる」　・・・・3
4. 自由報告《１日目 201 教室》　・・・・4
5. 自由報告《１日目 202教室》　・・・・5
6. 自由報告《１日目 104 教室》　・・・・6
7. 自由報告《２日目 201教室》　・・・・7
8. 自由報告《２日目 202教室》　・・・8
9. 自由報告《２日目 104教室》　・・・9
10. フィールドワーク　・・・10

II.　総会報告　・・・・10

III.　理事会報告

第 10 期第 5 回（2023 年 10 月 22 日)・・・14
第 10 期第 6 回（2023 年 11 月 11 日)・・・16
第 11 期第 1 回（2023 年 12 月 23 日)・・・16
第 11 期臨時（2024 年 2 月 2 日）　・・・19

II.　お知らせ

1. 『日本オーラル・ヒストリー研究』第 20 号原稿募集 投稿規定と執筆要項・・・21
2. 会員異動　・・・・27
3. 2023 年度会費納入のお願い　・・・・28

＊ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

Ⅰ．日本オーラル・ヒストリー学会　第２１回大会報告

１．　大会を終えて

開催校として、ご参加くださった皆さん、運営に協力くださった皆さんにあつく御礼を申し上げます。

自由論題のエントリーは過去最多となり、参加者数は 11 日・12 日の両日で 119 名にのぼりました。沖縄に関連した報告が行われた会場では、地元の市民や学生も多数、参加し、熱心な議論が繰り広げられました。

本当にありがとうございました。

（第 21 回大会開催校理事・野入 直美）

２．　会長企画ワークショップ「地域とメディア：語りを伝え、残すこと」

本ワークショップは、地元地域で多くの人々の語りを聞き、そしてそれをまとめ、伝えている方々を迎え、情報交換やその方法に関する意見交換を行うことを目的として開催された。日本全国には多様な地域紙（新聞）やローカル放送（テレビ）があり、地域の人々にとって非常に大きな役割を果たしている。大学業界においても、地域メディアの方々と連携し情報発信を行うことがこれまで以上に必要となっている。その意味でも、地域メディアで仕事をする方々が「何に注目し」「誰にむけて」「どのような取材をおこない」そして「どのように伝えているのか」を知り、考えることはオーラル・ヒストリー研究においても非常に重要なことだといえる。今回は「地域のテレビ・メディア」に注目し、テレビ・メディアでアナウンサー経験を持つ二人の方をゲストに迎えて報告をお願いし、参加者を交えてディスカッションを行った。

会長企画である本ワークショップでは、冒頭に、佐々木てる会長から主旨説明がなされた。会長からは、本学会（JOHA）には創設時より、実践的に聞き取りを行っている方々に、より積極的にかかわっていただくという理念があること、地域でそうした活動を行なっている人達と、成果や方法を共有することは学会として重要な意義を持つことが説明された。続いて、二人のゲストから基調報告がなされた。元琉球放送アナウンサーでナカトリモチの山野本竜規さんは「声なき声を聴く意義」と題して、地域で暮らす多様な人々の「声なき声」に耳を傾けて、それを地元で共有していくことにローカルテレビ局のアナウンサーの存在意義があるという報告があった。また、青森テレビアナウンサーとしてローカル放送番組への出演経験が豊富な今泉清保さんからは「アナウンサーとして話を聞くこと」と題して、市井の人々からどのように話を引き出すのか、その心構えや工夫などについての話があった。

ワークショップ後半では、ゲスト二人の報告内容を踏まえながら、参加者が二つの会場に分かれ、それぞれゲストを交えて少人数でのディスカッションを行った。ディスカッションでは、①地域メディアが日々行っている仕事は、地域の人々の話を集め、編集し、発信し、保存する、という意味で「オーラル・ヒストリー」的な実践でもある。②地域メディアとオーラル・ヒストリー研究者とは、うまいやり方を見つければ良きコラボのパートナーとなり得る。③地域メディアの現場の方々の仕事それ自体がオーラル・ヒストリー研究の重要な対象となり得る、という三つ

の論点が設定された。参加者からは、インタビューは一方向的なものでなく「対話的」なものにしたほうがより実りあるものになる、インタビュー相手に寄り添うながらも「共感」はすべきではない、オーラル・ヒストリー研究におけるヒアリングの記録は、今後は文字や音声だけでなく映像としても保存され、アーカイブ化されるべきだといった、それぞれの経験をもとにした活発な意見交換が展開された。

（米倉 律）

３． シンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか――実践的な身振りに目をとめる」

沖縄では沖縄戦については「聞き書き」という手法を通して、地域史、研究、平和運動、報道などが厚い記録を残してきた。しかし、占領や「復帰」後の歴史については「聞き書き」は十分に行われておらず、その時代を記録する方法としての課題を抱えている。沖縄戦の「聞き書き」が戦時の事実にとどまらず、戦争に巻き込まれた人々の生の有様を深く聞き取り証言化したようには、沖縄戦「後」の時代は記録できないのだろうか。こうした課題をふまえ、シンポジウムでは米軍支配（「復帰」以降も含めて）の時代について「聞き書き」や写真などの物証が伝える人々の声に着目する研究者の実践を紹介した。

謝花直美（同志社大学〈奄美–沖縄–琉球〉研究センター）は「『小さな声』と出会う――新聞はいかに戦後史を書くか」と題し、元新聞記者の視点から新聞における沖縄戦と戦後史報道の変遷と紹介、2022 年の「復帰」50 年の沖縄県内の新聞報道を通して「定型化」した報道の課題を指摘した。政治・経済など権力を持つ人々の声を取材対象とし「大きな声」による歴史を記録した新聞が聞き取られない「小さな声」を作り出しており、戦後史も「聞き書き」によって新たに開かれていくのではないかと指摘した。

小屋敷琢己氏（琉球大学）は「＜沖縄経験＞と表象文化／記録と表現のあいだ――火野葦平から阿波根昌鴻へ―≪写真」≪琉歌≫≪演劇≫」と題し報告。沖縄の戦後史が記録する抵抗の歴史が政治史であり、そこでは民衆の姿が欠落していることを指摘。阿波根は土地闘争の写真に留まらず、これまで注目されなかった人々の日常生活の写真とともに多くの琉歌（沖縄の抒情短歌）を残したと指摘。火野が沖縄を舞台とした小説『ちぎられた縄』の取材旅行の記録と小説、その演劇化を通していかに沖縄と民衆が表象化されたかを、多くの写真資料を通して紹介した。

池原エリコ氏（「コザ X ミクストピア研究室」）は、「場所と空間と商人の物語」などをテーマとし、2019 年に沖縄市の「銀天街商店街」にミクストピア研究室を立ち上げたことを紹介。国内外の研究者や学生が地元の人々に学び議論する場、沖縄の知識や可能性をいかす場として活動を広げている。人々の経験と歴史をアート化し記録する取り組みを報告した。人々との語らいの中から生まれた記憶の地図作りという方法によって、2020 年の企画「スケッチ・オブ・照屋」として商売に携わった第一世代の人々の経験を歴史として可視化させた。2024 年２月には「銀天街」内にインスタレーションとして表現する予定であることを説明した。

コメンテーターの若林千代氏（沖縄大学）は沖縄の戦後史を書く時に重要である米公文書の公開が厳しい制限下にあったことを指摘。先達の研究者たちがそれを開示させ、方法を開拓しながら戦後史を書いてきたことを紹介。これらの研究と、ナラティブによる研究が重ねられることによって、場を

もって立ち上がっていくと指摘した。

会場・オンライン合わせて 80 人余が参加した。司会の大門正克氏からは「ナラティブと場の関係性から言葉が立ち上がっていく」などの指摘があり、他に多数のコメントが寄せられた。今回の報告を通して、沖縄戦「後」の「聞き書き」を巡る様々な方法や視点が提示され、参加者と共有することができたことを感謝したい。なお、本シンポジウムの詳細は『日本オーラル・ヒストリー研究』第 19 号の特集として掲載予定である。

（謝花 直美）

４． 自由報告《１日目 201 教室》

本会場では対面と zoom のハイブリッド形式で６つの報告が行われた（報告者１名が欠席）。

第１報告の八鍬加容子「ホームレスと交流した人々の語りの変容に見られる、新たな社会構想」（オンライン）は、ホームレスについてのネガティブな言説が広く流布するなかで、対抗的な言説はいかにして生まれうるのかを、支援の場をフィールドに、ホームレスの人々と出会い、交流した人々への聞き取りと参与観察を通して考察した。

第２報告の朱子奇「創造的集団としての番組制作会社：オーラルヒストリーから見る作り手の考え」（オンライン）は、ある番組制作会社の創立メンバーへのインタビューを取り上げた。制作会社はテレビ局の下請けとみなされがちだが、テレビ局の指示に従うばかりではない。作り手たちはどのような考えのもと制作活動を行っているのかインタビューから明らかにし、制作会社のテレビ産業と文化における位置づけを考察した。

第３報告の丸川拓己「高校教育を取り巻く論理を問いなおす：困難を支える高校づくりをめぐる経験の語りから」（オンライン）は、中退や不本意入学などの困難が多いとされる高校で学校づくりに携わった教師のインタビューを吟味し、教師自身が生徒との出会いの中で自らの「あたりまえ」を変容させていった経験に、高校教育の論理を問い直す視点を見出した。

第４報告の中尾知代「戦争トラウマ記憶の世代間継承と世代間影響：第二次大戦連合軍捕虜とその家族」（対面）は、第二次世界大戦中に日本軍に囚われた捕虜・抑留者たちの戦中経験が、戦後かれら自身にトラウマを与え、家族にも影響を及ぼしたのか、逆に家族が元捕虜らに影響したのかを分析した。加えて、対日感情の変化についてのフィールドワークの成果も報告された。

第５報告の田野倉和子「「普通」の学校生活を求めた不登校経験者のライフヒストリー」（対面）は、不登校特例校へ転校した当事者へのインタビューから不登校経験に対する認識の変化を探り、不登校に関する法制度や多様な学びの場が拡大してもなお本人たちは学校教育や学歴社会へ方向づけられている実態を明らかにした。

第６報告の三田牧「ジョセフさんの語りはいかに解釈し得るか：パラオの「親日」言説をめぐって」（対面）は、データベース化によって語りが歴史的・社会的・文化的文脈から乖離することへの危惧を背景に、パラオの人々の日本統治時代を肯定するかのような語りの解釈について論じた。青年期に統治時代を過ごしたある男性の語りを紹介し、一見すると親日的な語りであっても単純な日本賛美と捉えることはできず、そこに海と島に生きる人々の世界観が表れていることが示された。

本会場はハイブリッド形式であったが、自分の報告時間に合わせて会場に到着・アクセスする、報告が終わったらすぐに退室するなど、一部の報告者のマナーの悪さが目についた。他の報告にもきち

んとコミットすることが、報告者としての責任ではないだろうか。

（石川 良子）

５． 自由報告《１日目 202 教室》

７つの自由報告の多くが、コミュニティの歴史（とりわけ沖縄戦や米軍基地との関わり）や文化の継承の問題を取り上げていたことが興味深かった。若い世代がそれらの記憶をどのように語り、受け継ごうとしているのか、そして、何が受け継がれていないのか、同じく若い世代の報告者がそれぞれのフィールドからその現状と展望を示し、沖縄という地で議論の場を共有することができたことの意義は大きい。以下に、各報告の概要を示す。

木谷彰宏報告は、「基地の街」コザがつくられ、商業都市への転換がはかられるなかで、置き去りにされた人びとに照準を合わせたものである。ジュディス・バトラーの２つの概念である「不安定性」と「切断線」を考察したうえで、置き去りにされた人びとの「窃盗」や「売春」「労働」といった行為を〈生きる〉という視点でとらえ、それらを、近年、福祉研究で使われている「メイクシフト・エコノミー」概念と重ね、議論の展望を示そうとした。

古梶隆人報告は、2013 年に琉球大学でつくられたディスカッションサークル「がちゆん」を検討したものであり、「がちゆん」のメンバーにオーラル・ヒストリーを行い、沖縄の若い世代による平和教育実践についての語りを考察している。考察を通じて、語りから見えてきたこと、語りから得られた知見の２つを検討し、これからの課題として、継承についてと地域との連携の２つに検討が加えられている。

吉成哲平・三好恵美子報告は、写真家である東松照明に焦点を合わせ、復帰前後の沖縄の現実への内省から埋めようとした「距離」をめぐって論じたものである。東松は、自らの「60 年」をばねに、沖縄で出会った一人ひとりから復帰以前の沖縄を表現しようとした。さらに日本本土の「加害」の歴史への責任から、沖縄との「距離」を埋めようとした東松に着目することで、人びとの人生をふまえた重層的歴史を解明しようとした。

石川勇人報告は、沖縄戦の「聞き書き」を行ってきた「記録者」に聞き取り調査をしたものであり、石原昌家をとりあげている。石原の記録活動を考察するとともに、石原はタブーをどう聞いてきたのかに焦点を合わせ、とくに、伊是名島での事件を契機にした聞き取り方法の変化について石原に尋ねた。ここから、石原はタブーに対する聞き取りを通じて、証言を多角的に考察し、事実を書いていく聞き書きの手法を確立させたとする。

永尾陽報告は、米軍に土地接収された読谷村の楚辺と牧原における「歴史継承」に焦点を当てたものである。二つの集落の自治会のフィールドワークにもとづき、それぞれの歴史的コンテクストの違いを読み解きながら、二つの自治会がヴァナキュラーな民俗や戦争の記憶を継承する活動を通して、コミュニティのつながりを維持しようとしてきたことについて報告した。

新川郁実報告は、海外のウチナーンチュ・コミュニティにアクション・リサーチを試み、そのネットワーク形成のあり方が変容しつつあることに新たな可能性を見出そうとしたものである。ウチナーンチュ・ディアスポラと呼ばれる状況の中で、オンラインでつながる沖縄にルーツのある人びとのコミュニケーションのあり方に注目し、そこに歴史や文化を軸として受け継がれているウチナーンチュとしてのアイデンティティを読み解いた。

須田佳実報告は、『沖縄県史 9 巻沖縄戦記録 1 』に収録された糸満市真栄平集落の地域座談会（1971 年開催）を対象として、沖縄戦体験者にとっての語ることと聞くことの意味を再検討しようとしたものである。座談会記録の読み直しと当該座談会の中心的人物への聞き取りを通して、沖縄戦体験者にとって、地域座談会の場が戦争体験の意味を確認し合う場であり、「復帰」を捉え返す契機ともなったとの結論を示した。

（大門 正克・北村 毅）

６． 自由報告《1 日目 104 教室》

この部会は和田悠と山田富秋が司会を担当し、9:30～12:00 までは和田悠が、13:30～14:30 は山田富秋が司会をした。いずれの発表にもフロアから活発な質問や意見が出され、議論が盛り上がった。

第 1 報告の木村豊・那波泰輔「空襲の記憶を継承する立場：非体験世代内における世代間の差異に着目して」は、戦後 75 年が過ぎ、戦争体験者世代の高齢化により、戦争を体験していない世代に対して戦争の記憶を継承する活動が多方面でなされてきたことを踏まえ、非体験世代における世代間の差異に着目し、空襲の記憶の継承の方法をインタビュー調査から明らかにした。

第 2 報告の藤原哲也「戦傷者の妻が語る戦傷病者の諸相」は、戦傷者の夫（2002 年没）の妻(1932 年生まれ)であり、福井県傷痍軍人会事務局長であった方の口述記録から、戦争体験をほとんど語らなかった亡き夫について、軍人恩給受給を拒否し理容師の仕事をしたこと、傷痍軍人会のずさんな会計処理が明るみに出た後に、夫婦で事務局を引き受けたこと、会として政党を通した傷痍軍人の地位向上に取り組んだ後、会を解散させた歴史について、時系列的に実際の語りを紹介した。報告後に、戦傷者自身ではなく、本人の妻が語ることの意味について、インタビューを行った調査者との関係性も含めて議論がなされた。

第 3 報告の舛谷鋭「文学研究とオーラルヒストリー」は、報告者の長い研究者活動の中で、マレーシアの非国語華人（サイノフォン）作家の研究にたどり着いた報告者自身の研究歴が紹介され、その後 30 年に渡るサイノフォン作家へのインタビュー内容と、サイノフォン作家たちの主要作品が紹介されるなかで、作品中の語りの意味についても興味深い分析がなされた。また、村上春樹のようなトラベルライティングにも言及され、外国おいては、日本にもサイノフォン作家の研究者がいると驚かれるところに、報告者自身の存在意義が確認できるとした。

第 4 報告の吉田祐子「オルタナティヴ・オーラル・ヒストリー：文化的沈黙と証言行為論」は、1995 年の阪神・淡路大震災後に写真作品制作を開始した写真家小谷泰子の 28 年間の制作の歴史について、小谷泰子が負った心的外傷を文化的沈黙と証言行為論の観点から分析した。小谷は震災後の心的外傷を言語化するのではなく、むしろ自らの身体を対象とした写真作品を制作した。しかしその後、20 年の沈黙を経て写真制作を再開する。考察を通して明らかになったのは、阪神淡路大震災のトラウマがメディアを通して伝播することと、ケリー・オリバーの証言行為（Witnessing）という考え方から、小谷泰子の制作行為がオルタナティブ・オーラル・ヒストリーとして位置付けられることである。

第 5 報告の小黒純・西村秀樹「「映像」シリーズ草創期の研究：社会派テレビ・ドキュメンタリー番組枠はいかに始まったか」は、優れたテレビ・ドキュメンタリーを長年にわたって生み出してきた北野栄三氏のオーラル・ヒストリーから、彼の代表的な作品の短い映像紹介も含めて、北野氏独特の制作哲学を明らかにした。彼は地域と現場に密着した取材に基づいたドキュメンタリー制作のパイオ

ニアであり、一時期『サンデー毎日』の編集長も務めた時にも、同誌をドキュメントの週刊誌と位置付けた。北野栄三氏が、名実ともに社会派テレビ・ドキュメンタリーの創始者であることが発表を通して明らかになった。

第 6 報告長村裕佳子「デカセギを経験する日系ブラジル人の文化とアイデンティティ：「日本人」の立場で聞き取るということ」は、ブラジルの日系人の日系文化とニッケイ・アイデンティティについて、「日本人」である調査者がデカセギ帰国者やその家族へインタビューする時、滞日経験を経てブラジルへ帰国した時、どのようなアイデンティティや関係性が生み出されるのかを明らかにした。それは、インタビュアーの「日本人」というポジションを意識しながら、時自分自身が「日本人」ではなく「日系人」であるという、両者の立場の微妙な差異が時にはプラスに、時にはマイナスに語られることである。そして、彼らの一定期間の滞日経験は、自らの日系文化や日系アイデンティティを再考するチャンスになるということでもある。

第 7 報告中澤英利子「ブラジルに渡った「花嫁移民」の語りをもとに：女性移民としての移動と生活の経験」は、「花嫁移民」として戦後にブラジルに渡った女性の語りをもとに、女性移民の実像を明らかにした。発表では、ブラジル・サンパウロの「コチア青年」と呼ばれた男性の独身農業移住者のために、鹿児島県人会の花嫁募集の活動実態が説明され、1962 年に写真花嫁として嫁いだ調査時 86 歳である一人の「花嫁移民」の語りが紹介された。それを通して、夫と妻が結婚に至るまでには県人会が中心的な役割を果たしたこと、花嫁たちはみな自己責任で移民生活を選択し、戦後のブラジル青年移民の定住と生活向上に大きく貢献したことが明らかになった。

（山田 富秋・和田 悠）

７． 自由報告《２日目 201 教室》

2 日目の自由報告、201 会場では、対面とオンラインのハイブリッド形式で 3 つの報告が行われた。

第一報告の八木良広「「市民」演劇への関わりと日常生活の変化 『河』の公演に携わった人たち」（オンライン）は、2017 年、2018 年に広島と京都で「市民」により上演された舞台「河」の出演者へのインタビューをもとにした報告であった。「河」は、原爆被害者が抱える心の傷や放射線の影響の問題等をめぐる問いを含む演劇で、「被爆二世」の女性 A さんが同舞台に出演した経験を機に共演者との関係性や同時代に対する意識を変化させていったプロセスを分析し、その意味を考察した。

続く、テーマセッション「国際オーラル・ヒストリー学会（IOHA）の最新動向と展望～2023 年 7 月開催の第 22 回リオデジャネイロ大会から」（対面）では、IOHA 第 22 回大会に日本から参加した 8 人によって 3 つの報告が行われた。はじめに、酒井順子・山本恵理子が「国際オーラル・ヒストリー学会略史」として、IOHA の概要、IOHA と日本（JOHA）との関係について紹介、1996 年 6 月に設立された IOHA は世界各国のオーラル・ヒストリー研究者と実践家が交流し、その国際的発展を目指す組織であること、隔年で国際大会が開催され、学会誌 Words and Silences が発行されて会員のみならず各国の関係団体相互の連携も行われてきたことなどが報告された。続いて、小黒純・中尾知代「第 22 回 IOHA リオデジャネイロ大会の概要 プログラム詳細や大会全体の様子の説明」で、第 22 回大会の全体像、プログラムの詳細が紹介され、当該大会の特徴や雰囲気が報告された。そして加

藤里織、フェルナンダ・モウラ、竹田響の 3 人から「リオデジャネイロ大会に参加して（体験談）」として、同大会に参加して研究発表を行なった 3 人から、参加者としての体験談、同大会の感想などが語られた。いずれも豊富な写真や映像などを交えた報告で、オープンで活発な大会の雰囲気が伝えられるとともに、研究の国際的交流の活性化のためにも IOHA の大会への日本からの積極的参加が呼びかけられた。

最後の報告、矢吹康夫「どのようにして非当事者は運動に巻き込まれていったのか―マイフェイス・マイスタイルの『ヒロコヴィッチの穴』を事例に―」（対面）では、ユニークフェイスを「見た目問題」と言い替えて活動を展開してきたマイフェイス・マイスタイル（MSMS）が配信してきたユーストリーム番組にゲスト参加した「非当事者」の語りに注目しながら、MFMS の活動が、社会・非当事者を「敵」や「加害者」と見なさず、理解を求め共生を模索しているという特徴や意義を持つことが明らかにされた。

（米倉 律）

８． 自由報告《２日目 202 教室》

11 月 12 日（日）午前、琉球大学法文 202 教室における自由報告部会は 4 名の報告者から構成され、対面にて行われました。本部会の第一報告は、小林多寿子氏による「災禍とオーラルヒストリー(1) 南相馬市小高区におけるオーラルコミュニティ形成と地域の歴史の再構築」という報告でした。第二報告は大島岳氏による「災禍とオーラルヒストリー(2) 新しい生き方に向けた小高の社会構想をめぐる声の力」、そして第三報告は庄子諒「災禍とオーラルヒストリー(3) 福島県南相馬市小高区における避難指示区域への帰還者の語りからみるレジリエンス」という報告でした。三報告とも、福島県南相馬市小高区を事例とする「災禍とオーラルヒストリー」に関する共同研究の成果であり、被災地である小高区における社会の再生をオーラルヒストリーという視座から明らかとするという分析視角の密接に結びついた三報告でした。自由報告部会というよりも、テーマセッションにふさわしいような相互に密接に連関した興味深い三報告でした。第四報告は、以上三報告とは趣が異なり、中原逸郎氏による「戦後の花街（かがい）の生活：上七軒の茶屋関係者の聞き取りを中心に」というものでした。それは占領から独立そして高度成長期という戦後の歴史的文脈において、京都の花街の生活がどのように変化したかを丁寧に聞き取った興味深いものばかりでした。本部会は、興味深い報告ばかりであっただけでなく、対面での密度の高い質疑が行われ、生の声、対面でのオーラルならではのスリリングな質疑が交わされ、改めて対面でのやり取りの重要さをも実感できる部会でした。

（蘭 信三）

９． 自由報告《２日目 104 教室》

大会２日目午前中に行われた 104 教室会場の自由報告では、対面で 5 つの報告が行われた。多様なテーマだがそれぞれ大変興味深く充実した内容であった。

第一報告の吉村さやか「なぜ彼はヘアドネーション活動をやめたいと思うのか：ある美容師の語りから」は、髪を持たない女性の「生きづらさ」を軽減するための対処そのものが生きづらさを生み出

しつつも、その対処を放棄することの困難さをまず指摘した後、ヘアドネーションの活動を日本で展開したNPO法人の代用者である渡辺氏が報告者にコンタクトをとり、対話の中で活動をやめたい旨語っていることが報告された。「必ずしもウィッグを必要としない社会」を目指すはずが、「活動が拡大すればするほど辻褄が合わなくなってきた」という違和感や、メディア報道では「本当に伝えたいことがバッサリ切り捨てられ」、「感動ポルノ」として生産、消費されていることを意味するのではないかという考察がなされた。質疑応答の中で、ヘアドネーションで作られるカツラは18歳未満の子ども向けだが、カツラを望んでいるのは親であり、親の持つ社会通念であること、医療現場においてアピアランスケアの必要性が認識されていること、ヘアドネーションの活動にはビジネスとしての側面があるのでは、などが議論された。

第二報告の峯桃香「戦後の女性が女性の戦争責任を考えるということ：在野の女性史研究『銃後史ノート』の運動史／メディア史研究-」は、1970年～80年代に全10巻編纂された『銃後史ノート』の創刊号から携わったメンバー（女性史研究者として著名な加納実紀代とは異なる二人）への聞き取り調査から「女たちの現在を問う会」の運動的側面に焦点を当て、その二人の問題意識を明らかにするものである。「戦争疑似体験世代」としての意識と同時に、当時としてかなり高学歴である一方で主婦である状況が生じさせた孤独や知的格差への問題意識があることを指摘した。質疑応答では、先行研究分野の広がりや、聞き取り対象者二人の相違点などが議論された。

第三報告の王石諾・三好恵真子「中国社会転換期における「東北離れ」をめぐる女性たちの葛藤：結婚移民として中国東北から日本の東北へと移動した経験から捉える」は、中国東北地方の女性が日本の東北地方の男性と結婚することによる移動経験を、二人の聞き取りから明らかにする。インフォーマント二人は1960-70年代生まれであり、満洲についての記憶の空白期、そして内向きの愛国主義教育期に生まれそだっているが、改革開放経済から取り残されて失業問題が深刻になり、東北地方から離れる選択をした。その移動の過程で、来日後に中国残留孤児日本人と関わったり、義父母と対話することで、個々人の「満洲」という記憶が立体化していくと考察した。質疑応答では、インフォーマントの日本への移動の個人的なきっかけや、日本側の「東北地方」という特徴が明瞭に出ていないのでは、といった議論がなされた。

第四報告の冷昕媛・三好恵真子「人間と自然が共存するアジア的理性の創出：中国初代NGOリーダー万氏のライフヒストリーから読み解く」は、「圧縮された近代化」によって深刻化する中国の環境問題に対して、1990年代以降に創設された環境NGOリーダー万氏の活動についての聞き取り調査を行い、中国の複雑な環境実態を認識し、地域住民との協働関係を創出したのかを描きだすものである。万さんのライフヒストリーを通してNGOの困難と成長が描かれ、地域農民の葛藤を乗り越えて自然と地域の人々の共生が成し遂げられつつあることを、「アジア的理性」と考察した。質疑応答では、万氏以外の地元住民の聞き取りをどのように行ったのか、「アジア的理性」はやや飛躍があるのでは、といった議論がなされた。

第五報告の高橋侑里「アジア系アメリカ人映画祭　分断から緩やかな連帯へ」では、サンフランシスコ各地で開催されているアジア系アメリカ人映画祭についての運動実践が報告された。1960年代の公民権運動以来、自分たちの歴史を掘り起こそうとして始まり、10日間で150本が上映される。映画祭を鑑賞することが能動的な主体を生成し、アジア系のコミュニティを絶えずつくり出していくクリエイティブな集団的プロセスであることが考察された。質疑応答では、サンフランシスコの慰安婦

像設立問題がアジア系コミュニティや日系人に及ぼした影響の問題、「インターセクショナリティ」や「連帯」といった概念は現場ではあまり使用されていないことなどについて議論された。

（佐野 直子）

１０． フィールドワーク

大会初日 11 月 10 日、シンポ「沖縄を巡る占領体験をどう書くか／どう聞くか」報告者の池原エリコ氏（コザ X ミックストピア研究室）を案内役に沖縄市の戦後復興の始まりの地「コザ十字路商店街」（現コザ銀天街）を参加者 29 人と歩いた。同商店街があった沖縄市（旧越来村）照屋一帯は、1960 年代のベトナム戦争時には「黒人街」と呼ばれた街として知られる。沖縄戦直後、一帯にはコザ収容所があった。解放された人々は、軍用地に土地をとられた結果、基地を取り囲むように住んだ。米兵だけでなく民間人向けに人々は、衣料品、化粧品、パーマ屋、食堂など多種多様な商売を始め、やがて商店街が形成された。池原氏は戦後周囲の農村を合併し拡大したコザ市の始まりをこのように説明した。現在のコザ銀天街はシャッターを下ろした店も多い。営業を続ける第一世代の商店主の店舗は、築何十年もたつが重厚なコンクリートの立派なものであった。こうした建物は華やかな時代を示すに留まらず、米兵相手のビジネスが可能となる基準「A サイン」を得るため、仕様が事細かに決められていたという。また店主の方々は本部町などから仕事を求めて移動してきた人々も多く、ここに場を得て根を下ろし復興を歩んだという。店主の方々の話は短い時間であっても、「基地の街」「黒人街」という言葉からはこぼれる経験を鮮やかに伝えていた。また「第 3 世代」と呼ばれる若い商店主が現在戻り初め、新しいビジネスを始めているとう。聞き取りを続ける池原氏と歩くことで、おろされたシャッターの向こうにある語られざる人々の経験、変化し続ける商店街の呼吸を感じ取ることができた。戦後のコザ市全体の歴史を展示・解説する沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」を訪ね、学芸員の伊敷ひろみさん、伊佐真一朗さんから沖縄市の沖縄戦と戦後史について解説を受けた。改めてオーラル・ヒストリーとは人々の言葉、場所、空間、残された品々とともにあることを体感した時間となった。

（謝花 直美）

Ⅱ．総会報告

2023 年度総会　議事録

【日時】2023 年 11 月 11 日（土）17：10～

【場所】琉球大学千原キャンパス文系講義棟 201 教室および ZOOM オンラインによるハイブリッド開催

会長挨拶、議長選出（滝田祥子会員）の後、以下の議案が諮られた。

第 1 号議案　　2022 年度事業報告

2022 年度（2022 年 9 月 1 日～2023 年 10 月 31 日）事業報告について、以下の諸点が報告され、質疑なく承認された。

1. 会員数の現状（事務局）

前回大会（2022 年 9 月 11 日）以降、2023 年 3月31 日までの新規入会者は 7 名（一般 2 名、学生他 5 名)、4 月以降の入会者は 40 名（一般 20 名、学生他 20 名）であった。3 年間の学会費未納による自動退会者 7 名、自己申告退会は 5 名あった。2023 年 10月31日現在の会員は 310 名（前回 275 名）である。昨年大会時とくらべて 35 名の増加である。

2. 第 20 回大会（JOHA 20）の実施と第 21 回大会（JOHA21）の開催（事務局）

20 周年記念大会にあたる第 20 回大会は、立教大学にて 2022 年 9月10 日・11日の 2 日間、対面・オンラインのハイブリッド形式で実施した。自由報告は 2 日間で 10 本が報告された。また、日本オーラル・ヒストリー学会 20 周年記念会長企画「JOHA はどこから来て、どこに向かうのか?」、国際シンポジウム「東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史の展開と課題」を実施した。

第 21 回大会は、琉球大学にて 2023 年 11 月 11 日・12 日の 2 日間、対面・オンラインのハイブリッド形式で開催する。

3. シンポジウムの開催（研究活動委員会）

2023 年 3 月 11 日研究交流集会「沖縄戦をいかに書くか」を開催した。会場は那覇市沖縄県立博物館・美術館の美術館講座室でハイブリッド形式で開催した。1970 年代以来編纂が続く地域史における聞き取りの歴史と現在について、その担い手と聞き取り資料の研究者からの発表を受け議論した。会場参加は 25 名、オンラインでも多数の参加者を得た（詳細はニュースレター第 44 号記載)。

なおこの他に予定されていた企画については、第 11 期の期間中の開催を理事会にて検討する。

4. 実践ワークショップの開催（研究活動委員会）

2023 年 10 月 29 日ワークショップ「作品と現地を結ぶ :『ごめん！聞いてごめんな』の現場をたずねて」を実施した。29 名の参加を得た（会員は約半数)。著者である大賀喜子さんのご案内で新大阪付近のフィールドワークを実施したのち、元西淡路小学校内で参加者との質疑応答をおこなった。

5. 学会誌 18 号の発行と 19 号の編集・発行（編集委員会）

18 号から学会誌の刊行先がインターブックス社から明石書店に変更され、『日本オーラル・ヒストリー研究』第 18 号は、表紙デザインなども刷新されて 2022 年 10 月に刊行・発送された。また 19 号についても 2023 年 10 月に刊行・発送された。また、19 号から投稿規定が改訂され、投稿カテゴリーなどが変更された。

なお、現在編集委員長と会計が保管している 17 号以前までのバックナンバーについては、残部が多いものを特別価格で販売後、一定数を残して 2023 年末までに廃棄する。

6. 学協会誌の電子化事業（編集委員会）
学協会誌の電子図書館事業が 2016 年度に終了となったことに対して、本学会では 2017 年より J-STAGE に参加している。2023 年 10月31日の時点で、JOHA 17 号（2021 年）まで Web 上に公開されている。

7. ニュースレターの発行（広報）
ニュースレターは、第 43 号(2023 年 1月23日)、第 44 号（2023 年 10月7日）を発行した。広報が編集を担当し、会員メーリングリストでの配信、ならびに学会 HP での公開を行なった。

8. 学会ホームページの充実と会員相互の情報共有（事務局）
事務局にて学会 HP（http://joha.jp/）および学会メーリングリストを管理運営している。また、前回総会決議を受け、YouTube 上で JOHA チャンネルを開設した。今後は内容の充実に努めていく。それぞれの媒体を通じて情報の公開・共有が適宜なされている。

以上

第 2 号議案　　2022 年度決算報告
2022 年度決算報告資料に基づき、会計担当理事から正誤の修正の後、各項目について報告され、質疑なく承認された。

第 3 号議案　　2022 年度会計監査報告
小林多寿子幹事より、2022 年度会計について監査し問題がないことが報告された。また、有末賢幹事より、2022 年度会計について監査し問題がないことがオンラインで報告され、質疑なく承認された。

第 4 号議案
2023 年度 （2023.11.1～2024.8.31）事業案について、以下の諸点が報告された。

1.会員の拡大と維持（事務局）
年次大会やシンポジウムなどを実施し、これらの情報を広報することで本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入の確保のため、年内を目途に入金状況の確認を行ない未納退会者を防ぐようにする。

2.第 21 回大会（JOHA21）の実施と第 22 回大会（JOHA 22）の準備（事務局）
第 21 回大会（JOHA21）は、2023 年 11月11・12日の２日間にわたって琉球大学（沖縄県）において実施する。個人報告 30 本、共同報告２本、テーマセッション１本を予定している。大会初日には、会長企画ワークショップ「地域とメディア : 語りを伝え、残すこと」、2日目には大会シンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか――実践的な身振りに目をとめる」を開催する。広報

活動として学会 HP に掲載し、国内外の関連団体への広報に努めている。
2024 年度の第 22 回大会（JOHA 22）は、青森公立大学にて 9 月上旬に 2 日間の開催を予定している。

3.学会誌第 19 号の発行と第 20 号の編集（編集委員会）
学会誌第 19 号は、第 10 期理事会の編集委員会によって、JOHA20 のシンポジウムと研究実践交流会、自由投稿をもとにして編集・発行した。また第 20 号は、第 11 期理事会の編集委員会によって編集を行なう方針である。

4.シンポジウム・ワークショップの開催（研究活動委員会）
大会運営の他、研究実践交流会、「作品と現地をむすぶ」ワークショップなど各種の企画を開催することで、研究の発展と会員の相互交流など学会としての役割を果たしていく。

5. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流（研究活動委員会）
国際担当理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

6. ニュースレターの発行（広報）
JOHA21 後に大会報告を中心にしたニュースレター第 45 号（2024 年 2 月予定）を、JOHA22 前に大会プログラムを中心にした第 46 号（2024 年 8 月予定）の発行を予定している。

7.会員相互の交流促進（事務局）
学会 HP や会員メーリングリストの活用、ニュースレター配信を通じて、会員相互の交流を促進する。また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

8.学会ホームページの充実と改善（事務局）
事務局を中心として学会 HP をリニューアルし、さらに見やすく整備して JOHA の活動を広く発信するとともに、新規会員の増加に寄与することを目指す。

以上

中尾知代会員から SNS の利活用を拡大する提案があり、会長より次期への引き継ぎ事項に加えると応答した。
上記の質疑を経て、修正なく第 4 号議案（2023 年度事業案）は承認された。

第 5 号議案
会計担当理事から 2023 年度予算案の説明があり、質疑なく承認された。

第 6 号議案

第 11 期（2023-2025）理事選挙の結果について事務局より説明された。
山本恵理子会員から、理事の選出結果について見解が表明された。
佐々木てる会長が今後の学会の課題として倫理規定等の制定があると応答した。
質疑の後、拍手をもって新理事会案が承認された。

第 7 号議案

事務局から第 11 期理事会構成案が提案され、拍手をもって承認された。
新会長の石川良子氏から就任にあたっての所信表明がなされた。

第 8 号議案

日本オーラル・ヒストリー学会　第 1 回（2023 年度）奨励賞について、選考委員会委員長の大門正克理事より結果と選考経過、選出理由について報告がなされた。選考結果は質疑なく承認された。

理事会提案の議案はすべて承認され、議長が解任された。

8 号議案にて受賞が決定した江口怜会員、謝花直美会員に対して受賞式が実施された。
佐々木てる会長から両名に賞状および副賞が授与された。
両名から受賞に対するスピーチが行われた。

Ⅲ．理事会報告

第 10 期 第 5 回 JOHA 理事会　議事録

【日時】2023 年 10 月 22 日（日）9:00～11:00（オンライン開催）
【出席者】佐々木てる・佐藤量・李洪章・佐野直子・酒井朋子・椙本歩美・山田富秋・米倉律・安岡健一・蘭信 三・大門正克・清水美里・謝花直美・和田悠・野入直美
【議事録】佐野直子

審議事項
①　第 21 回大会について
　開催校（琉球大学）の野入直美理事と会計の李洪章理事から、現在の Peatix からの申し込み者数の報告があり、当日の受付業務の簡略化や Zoom の設定方法（１つの教室を一日開放する形で、ワークショップやシンポジウム、総会などをそのまま行う）ことが提案され了承された。また、当日の進行についての確認が行われ、資料は特設サイトを作って各自ダウンロードを行うことなど、種々議論され、了承された。

② 奨励賞について

大門理事から、奨励賞決定の経過報告があった。

著書の部　江口怜『戦後日本の夜間中学―周縁の義務教育史』東京大学出版会，2022

論文の部　謝花直美　「移動と引揚げが作った『金武湾』という地―米占領下、沖縄の生存と労働」『日本オーラルヒストリ研究』15 号，2019

に決定されたことが了承された。大会の総会で発表を行い、総会後に授賞式とスピーチをすること、会長が学会 ML で奨励賞の授賞者とタイトルを知らせて授賞式を告知すること、事務局は賞状と副賞を準備すること。また授賞式の光景を HP に掲載し、来年刊行の次号の学会誌に掲載することが了承された。

③ 会計について

李理事から 2023 年の会計報告が行われた。総会に向けて会計監査へ報告すること、また大会での非会員ワークショップ・シンポジウム登壇者への交通費と謝金の支払い手続きが完了したことが報告され、了承された。また、17 号までの刊行元であったインターブックス社から、17 号の J-Stage への掲載が完了したと報告があったことも確認された。

④ 研究活動委員会

安岡理事から、「JOHA チャンネル（Youtube)」の創設と現状についての説明があった。また、次回第 21 回大会ではどのように運用するかも議論された。個別報告においてアップを希望した報告者については四役で審査の上で公開し、大会シンポジウムについては今後依頼・調整（限定公開か一般公開かなど）すること、質疑応答部分はオーディエンスに許諾を取るのが困難なため、公開しないことが決定された。さらに、次回以降の大会については、次期理事会・研究活動委員会で検討し、次期理事会において「JOHA チャンネル担当」を作ることも了承された。また、10 月 29 日開催の JOHA 企画ワークショップ「作品と現地をつなぐ」について、その実施が報告された。当日撮影の動画については後日扱いが協議されることが決まった。

⑤ 広報委員会

野入理事から、ニュースレターの締め切りが 1 月末であること、その際に第 21 回大会の報告が行われるので、自由報告については司会が原稿を作成することが確認された。

⑥ 編集委員会

佐野から『日本オーラル・ヒストリー研究』第 19 号の作成が進んでいること、10 月に刊行予定であることが報告された。また、現在会計と編集委員長が保管しているバックナンバー割引き販売を第 21 回大会で宣伝し、その後 11 月末ごろまでに過重在庫は廃棄することが提案され、了承された。

⑦ 事務局関連

佐藤理事から第１１期理事会体制が決定されたことが報告された。また、学会 HP について、作成と更新作業を委託するのは予算の関係から困難であるが、JOHA チャンネルや学会費のウェブ上支払いなどの HP 上の連携などが、次期事務局への申し送り事項となることが確認され、了承された。

第 10 期第 6 回 JOHA 理事会　議事録

【日時】2023 年 11 月 11 日（土）12:00-12:30（ハイブリッド）
【出席者】蘭信三・大門正克・佐々木てる・佐藤量・佐野直子・謝花直美・野入直美・安岡健一・山田富秋・米倉律・李洪章・和田悠・酒井朋子・椙本歩美（敬称略）
【オブザーバー】小黒純・中尾知代・北村毅・石川良子・根本雅也・酒井順子・橋本みゆき・清水亮
【議事録】李洪章

報告・審議事項
1.　理事会の開催形態の確認
本理事会は当初、新旧合同理事会として開催予定であったが、新理事会は 11 月 11 日大会昼休みの時点で総会での承認を受けていないため、あくまで現理事会として開催し、会長が新理事候補者をオブザーバーとして招待する形で開催することとした。

2. 大会開催校からの報告
大会開催校から、今大会での経験をふまえて今後の大会運営について以下の提案があった。
・前回開催校から大会運営の引き継ぎを行う
・学生アルバイト代の引き上げ（現在は 1000 円、早朝割増賃金の検討）
・zoom 契約を開催校ではなく理事会で担う

3. 2023 年度総会について
2023 年度総会の流れと議事の確認を行なった。

第 11 期 第 1 回 JOHA 理事会　議事録

【日時】2023 年 12 月 23 日（土）9:30～12:00
【出席者】蘭信三、石川良子、大門正克、小黒純、北村毅、酒井順子、酒井朋子、佐藤量、清水亮、謝花直美、中尾知代、根本雅也、橋本みゆき、森亜紀子、李洪章
【議事録】根本雅也

会長挨拶
石川会長よりあいさつ

編集委員会
- 献本および J-stage へのアップロード作業について

北村編集委員長より、第 1 回編集委員会が 1 月上旬に開催予定であり、そこで書評などについて決めていくことが報告された。なお、一部の書籍については、「図書紹介」という枠で、自著紹介をお願

いすることも検討していることも指摘された。J-stage のアップロード作業については、インターブックス社が作成した ID は引き継げないことから、事務局が新たにアカウントを作成したことが報告された。

酒井（朋）理事より、前期の編集委員として、書評の担当者を探すことの難しさが指摘された。編集委員会内にとどまらず、理事全体からアイデアを募る方が良いかもしれないと提案がなされた。

書評の執筆候補者の選定にあたり、会員の氏名などを中心に情報共有が編集委員会より求められ、了承された。

研究活動委員会

- 第 11 期研活企画案について

大門研究活動委員長より、研究活動委員会の 1 回目の会合が 12 月 15 日に開催されたこと、1 月か 2 月にもう一度開催される予定であることが伝えられた。先の集まりでは、オーラル・ヒストリーに関する各委員の取り組みを共有し、それをもとに研活でやれることを話し合ったことが報告された。

- 前理事会からの持ち越し企画について

大門研究活動委員長より、前期の研活の持ち越しとして、2024 年 3 月に「オーラルヒストリーと学校歴史教育」という企画を行う予定であったこと、しかし、登壇予定者の体調不良のため 3 月開催は難しくなったことが報告された。3 月は研活としての行事を具体化することは難しいため、石川会長と相談したことが説明された。

蘭理事より、現在、2 月に長野県飯田市で、中国帰国者の三世・四世に焦点を当てたイベントを企画していること、登壇者のうち半数は JOHA の会員であることから、JOHA の後援や共催でも問題ないのではないかと提案が出された。

蘭理事の提案に対して、理事で審議した結果、今回の企画が JOHA が関わるに適切であると判断され、JOHA が「後援」するということが決定された。

- JOHA21 沖縄大会開催校からの報告

事務局（佐藤）および謝花理事より、前理事会に琉球沖縄歴史学会より意見書が届いたことが報告された。前理事会でも対応策を協議中だが、新理事会としては再発防止に努めることが確認された。

- 次回大会について

青森公立大学にて、2024 年 9 月 13-15 日に開催されることが決定された。これに関連して、2024 年 2 月ごろに臨時理事会を開催する必要性が事務局より伝えられた。

大門研究活動委員長より、臨時理事会の開催日について、第 2 回の研究活動委員会の会合の後とすべきことが提案され、確認された。

また開催形態については、第 2 回研究活動委員会および臨時理事会にて審議することとなった。

広報

- 次号ニューズレターについて

酒井広報委員長より、次号のニュースレターの内容について共有・確認がなされた。また前回のニュースレターが学会ウェブサイトに掲載されていないという指摘がなされ、事務局が対応することが確認された。

会計・事務局

- 丸善雄松堂での学会誌販売について

会計（李）より、学会誌のバックナンバーの扱いについて①すべてのバックナンバーを売るか、②過去 3 年分のみを販売するか、という二つの案が出された。会計が全てのバックナンバーの一部（たとえば 10 部ずつくらい）を所持しつつ、丸善からは過去 3〜5 年分を販売するのではどうかという議論が出た。引き続き検討していくことが確認された。

- インボイス事業者登録について

会計（李）より、インボイス事業者登録について、しばらくは免税事業者としてホームページ等に明示し、インボイス事業者登録しないことが報告された。

- 大会収支報告

会計（李）より、沖縄大会の収支が報告された。赤字が 22 万 5 千円であり、その要因としては、ハイブリット対応や、非会員の登壇者への交通費が挙げられた。シンポジウムの非会員登壇者については、交通費を考慮して欲しいという要望が会計より出された。

- 学会ホームページの再構築とクレジット決済システムの導入について

事務局（佐藤）より、現在、ホームページの再構築が検討されていることが報告された。通常の制作会社に依頼すると 80 万〜100 万かかることから、自分たちで制作することも視野に入れている。ウェブサイト作成サービスとして、STUDIO を検討していることが伝えられた。

蘭理事より、ホームページについてはプロに任せた方が良いのではないかという意見が出された。その場合、イニシャルコストで 30 万円程度に抑えられること、ただしメンテナンスは自分たちでやるという形が示唆された。

- 会員名簿管理について

事務局（佐藤）より、もともと JOHA には事務局と会計がそれぞれに名簿を持つという状態が続き、情報が錯綜していたことから、会計と事務局の間で情報の共有、効率化を行いたいと説明された。

- 学会誌バックナンバー在庫管理（編集＋会計）
- 事務局住所の変更

事務局（佐藤）より、事務局の住所を立命館大学から一橋大学へと移すことが報告され、確認された。

その他

- JOHA 叢書について

蘭理事より、現時点での JOHA 叢書の企画が共有された。編者 4 名は決まっているが、その内容や冊数などについては今後編者で決めていくことが説明された。

- 倫理委員会について

石川会長より、佐々木前会長の話として、次回大会の総会で立ち上げを報告し、その後から動き始めるのが良いのではないかという報告がなされた。

- JOHA チャンネルの管理運営

事務局（佐藤）より、安岡・前研活委員長が立ち上げた JOHA チャンネルについて報告があった。アカウントの管理を事務局の佐藤・根本に移すものの、どのように運用していくのか、今後検討していくことが説明された。

- X（旧ツイッター）について

中尾理事より、イベントの告知のツールとして X（旧ツイッター）の使用が提案された。

石川会長より、現時点ではホームページ作成に注力し、その後で X 等の使用を検討してはどうかと提案がなされた。

- その他

中尾理事より、大会などの場で、発言を求めるときに、所属ではなく、オーラル・ヒストリーに関連してどのようなことをしているのかにしたら良いのではないかという提案がなされた。また、終身会員制度の存在について疑問が提起された。

酒井（順）理事より、終身会員などについては内規のようなものがあるのではないか、それについて確認すべきではないかと提案がなされた。

蘭理事より、過去に理事を務めた方が亡くなられたときに、その訃報を会報で知らせるかどうか、対応の仕方を統一した方が良いのではないかと指摘された。

事務局（佐藤）より今後審議していく旨が説明された。

第 11 期 JOHA 臨時理事会　議事録

【日時】2024 年年 2 月 2 日（金）13:00～（オンライン）

【出席者】石川良子、大門正克、北村毅、酒井順子、酒井朋子、佐藤量、中尾知代、根本雅也、橋本みゆき、森亜紀子、李洪章

【議事録】酒井朋子

報告・審議事項

1. 大会について

開催校理事より：佐々木開催校理事から現在の準備状況について説明があった。日程は 2024 年 9 月 13（金）、 14（土）、 15 日（日）、場所は観光物産館アスパムでほぼ確定している。アスパムでは部屋を 4 室予約、懇親会は 14 階のラウンジで開催、エクスカーションは浅虫温泉を予定している。開催方式は、ハイブリッドにはせず、対面のみとする予定である。託児スペースの設置について議論があり、予算を考慮しつつ継続検討することが確認された。託児スペース利用の希望についてアンケートを行ってはどうかという提起があった。

研究活動委員会より：大門理事から、大会二日目の午後のシンポジウムは「戦争とトラウマ」のテーマで準備中との報告があった。

会計・予算：佐々木理事から、大会に関連して県内でのべ 100 泊の宿泊があると青森県から補助が出るとの情報提供があった。石川会長から参加費の値上げの可能性について提起があり、会費との関連で値上げが急激にならないよう注意しつつ、引き続き検討していくこととなった。

2. 各委員会より

研究活動委員会：大門理事から、JOHA 企画フィールドワーク「作品と現地をつなぐ」2024 の準備状況報告があった。日程は 6 月 30 日（日）午後、「横浜――『それは、丘の上から始まった』の現場をたずねて」となる。2023 年に刊行された『それは、丘の上から始まった』（ころから）の著者後藤周著さんに話をうかがいながらフィールドワークを行う予定。

編集委員会：北村理事より、『日本オーラル・ヒストリー研究』第 20 号原稿募集開始について報告があった。投稿論文・研究ノートの募集期間は 2024 年 2 月 18 日（日）～3 月 2 日（土）、その他の投稿原稿の募集期間は 2024 年 5 月 12 日（日）～5 月 25 日（土）となる。第 19 号の投稿規定・執筆要領が最新のものではないことに注意喚起された。第 20 号では 2 つの特集を掲載予定で、特集 1 は第 21 回大会シンポ「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか：実践的な身振りに目をとめる」（2023 年 11 月 12 日開催）の内容、特集 2 は「中国残留日本人「三世・四世」と名乗るということーその意味と意義を問う」（2024 年 2 月 10 日開催予定）の内容を原稿化したものとなる。ただし投稿論文の数に応じて特集 1 のみとなることもありうる。また、JOHA 企画ワークショップ「作品と現地を結ぶ」2023 の内容を参加者の大学院生が執筆し、実践報告として掲載することが予定されている。書評 6 冊、図書紹介 2 冊が予定されている。書評者・執筆者への書籍送付は完了している旨報告された。また、原稿末尾の執筆者ふりがな・所属・身分・メールアドレス情報について、「身分」はいらないのではないかとの申し送り事項があり、編集委員会内で検討した旨、報告された。この件に関して議論の結果、さまざまな形で研究教育活動に携わるオーラルヒストリアンがいることを鑑み、現在「所属・身分」となっている部分を「所属、職業、研究分野、立場等」の内容とする方向で決定した。

広報：第 45 号ニューズレターの準備状況について、原稿はおおむね集まっており 2 月中旬に発行する予定との旨、酒井理事から報告があった。

会計・事務局：李理事より、学会誌バックナンバー在庫管理について、過去 5 年分より前の号については 20 部を残して廃棄する方向との旨、報告があり了承された。また、事務局が 2 月 1 日付で根本理事の研究室に移動したことが佐藤理事・根本理事より報告された。

Ⅳ．お知らせ

1. 『日本オーラル・ヒストリー研究』第２０号原稿募集 投稿規定と執筆要項

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。投稿希望者は学会ホームページで公開されている最新版の投稿規定・執筆要領を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿をご送付ください。投稿に関するお問い合わせも下記アドレスまでお願いいたします。論文・研究ノート原稿は査読審査を経たのち、6 月下旬ごろに掲載の可否が決定します。

○ 投稿論文・研究ノートの募集期間：2024 年 2 月 18 日（日）～3 月 2 日（土）
その他の投稿原稿の募集期間：2024 年 5 月 12 日（日）～5 月 25 日（土）

※原稿の種類によって〆切が異なります。お間違えのないようお気をつけください。
※メールの送信ミスや誤配の可能性があるため、募集期間を設けています。余裕を持ってご送付いただきますようお願いいたします。
○ 問合せ・応募原稿送付先：joha.editors(at)gmail.com（ (at) 部分を@に替えて送信してください。）

※最新の 19 号に掲載されている執筆要項に、ミスがありました。申し訳ございません。最新版の投稿規定・執筆要領はこちらになりますので、熟読のうえ原稿を作成するようにお願いたします。投稿規定・執筆要領に従っていない原稿は受理できません。

『日本オーラル・ヒストリー研究』投稿規定

投稿者は投稿規定・執筆要領を熟読のうえ原稿を執筆してください。また、最新版を学会ホームページに掲載しているので、必ず確認してください。投稿規定・執筆要領に従っていない投稿は受理しません。

① 投稿は会員に限ります。まだ会員でない方は、投稿する前に入会の手続きを済ませてください。なお、入会申込書の受理・会費の納入確認をもって入会手続きは完了します。
② 投稿原稿は原則として日本語か英語によるものとします。
③ 投稿は下記のカテゴリーで未発表のものとし、それぞれ規定の文字数で執筆してください。
なお、表題、英文要旨（論文のみ）、見出し、図表、注、文献リスト等も文字数に含みます。
A. 論文　16,000 字～28,000 字以内
B. 研究ノート 18,000 字以内 ※地域などでの聞き取り実践に基づく考察、研究の中間報告あるいは予備的考察や試論、研究の着想など、論文としての要件は必ずしも満たさないが発表する意義があ

るもの。

C. 聞き書き資料、実践報告、研究動向（国内外・回顧と展望）、資料紹介、書評論文等　18,000 字以内

※編集委員会が適当と判断したものも、受け付けます。

D. 書評・図書紹介　4,000 字以内

※会員の自著紹介を歓迎します。また、非会員の著書も歓迎します。

（英語論文に関しては執筆要領を確認、その他は編集委員会に確認してください。）

④ 論文の英文要旨は 200 語未満とします。英文の表題と要旨については、希望者には掲載決定後に編集委員会を通じ、校閲作業を依頼します。ただし、この作業にかかる費用は投稿者の自己負担とします。

⑤ 原稿は、執筆要領にしたがって、MS Word による横書きとします。審査用の原稿は、Word ファイルおよび pdf ファイル両方のデータを下記の編集委員会のメールアドレスまで電子メールに添付して送付ください。原稿のファイル名は「投稿の日付_投稿者氏名（ローマ字表記）」とします。

例）20220301_johataro.doc

⑥ 投稿者は別ファイルに、氏名、郵便番号と住所・電話番号、メールアドレス、所属機関と電話番号、投稿のカテゴリーを明記し、電子メールに添付してください。ファイル名は「投稿者」の氏名（ローマ字表記）とします。

例）johataro.doc

⑦ 投稿原稿 A・B は原則として査読審査を経て、編集委員会が掲載の可否を決定します。また、審査は匿名で行います。したがって、「拙著」「拙稿」などの表現や、研究助成、共同研究者への謝辞など、執筆者と所属機関が特定できる情報は審査用原稿に記載してはいけません。ただし、掲載決定後に送っていただく完成原稿で修正・追記することができます。投稿原稿 C・D については、査読審査はせず、編集委員会が掲載の可否を決定します。その際に編集委員会からなんらかのコメントを送り、加筆修正を求めることがあります。

原稿締め切り：投稿原稿 A・B　3 月初め

投稿原稿 C・D　5 月末（投稿 A・B の査読結果締め切りと同時期）

⑧ 本誌に掲載された論文等は、原則として本誌発行 1 年後に電子公開します。掲載原稿の著作権の一部（複製権・公衆送信権）を、日本オーラル・ヒストリー学会に譲渡していただきます。著書などに転載する場合や、機関リポジトリ等へ電子データを搭載する場合には、必ず本会の許諾を得てください。

⑨ 当該論文の抜刷は、別途、有料にて制作可能です。ただし、50 部単位とし、抜刷の希望者は、初校返送時に編集委員会に申し出てください。

原稿送付先：　日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会

joha.editors(at)gmail.com

日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会

蘭信三・北村毅・清水亮・橋本みゆき・森亜紀子

『日本オーラル・ヒストリー研究』執筆要領（和文原稿）

2004 年 12 月 23 日

日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会作成

（2008 年 10 月 2 日修正，2009 年 7 月 4 日修正，2012 年 7 月 7 日修正，2015 年 7 月 31 日修正，2016 年 7 月 31 日修正，2018 年 2 月 1 日修正，2019 年 8 月 31 日修正，2019 年 12 月 17 日修正，2020 年 8 月 17 日修正、2022 年 9 月 11 日修正, 2022 年 12 月 31 日修正）

A. 論 文

1. 原稿は A4 判 横書き（1 頁全角 43 字×40 行相当）で、分量は 16,000 字～28,000 字以内（英文 5000 ～ 8000 words）とする。表題、英文要旨、見出し、図表・写真、注、文献リスト等も文字数に含む。図表・写真は掲載誌 1 ページの 4 分の 1 程度以内の大きさのものは 1 点につき 400 字で計算するものとする（したがって、2 分の 1 ページ程度のものは 800 字に換算する。サイズの判断は基本的に執筆者にまかせるが、編集委員会が変更を求める場合もある）。MS Word の文字カウント機能を利用して数え、スペースを含めた本文の字数と、図表・写真の点数と上記ルールに従って換算した字数を、それぞれ原稿の冒頭に記載すること。

2. 提出する原稿の書式は次の通りとする。

（1）第 1 頁の構成

1 行目　和文題目（全角、中央揃え、副題がある場合は 2 行にわたることも可。副題の前後に――（2 ダッシュ）をつける）

2 行目　英文題目（全角、中央揃え、副題がある場合は 2 行にわたることも可。副題は：（コロン）を最初につける）

3 行目　空白行

4 行目　執筆者氏名（右寄せ）　※審査用原稿では空白行にする。

5 行目　執筆者氏名の英文表記（半角、右寄せ）　※審査用原稿では空白行にする。

6 行目　空白行

7 行目　英文要旨（半角、10 行以内）

1 行空白ののち、キーワード 3 点（全角、中央揃え）

（例）　キーワード：　社会移動,　移民女性,　世代

1 行空白ののち、本文をはじめる。

（2）本文中の小見出しの表記

1)章：1. ～　2. ～　3. ～

2)節：(1) ～　(2) ～　(3) ～

3)項：1) ～　2) ～　3) ～

（3）本文への注

該当箇所の右肩に（1）（2）（3）……を付し、注は本文末尾に一括する。MS Word の脚注機能は使用しな

いこと。

（4）文献リスト／文献注

1)本文と注で言及する参考・引用文献等は、一括してアルファベット順に並べたリストを作成し、論文末尾に付す。

a）各文献の表記は、基本的に、書籍の場合、著者氏名＋西暦発行年＋書名＋出版社、論文の場合、著者氏名＋西暦発行年＋論文名＋掲載誌名・巻・号（または編者氏名・収録書名・出版社）＋ページ、とする。

b）同一著者が同一年に発行した複数の文献は、発行年を 1987a，1987b，1987c…のように表記して区別する。

c）翻訳書には原著者名を付し、原著書と翻訳書の双方の発行年を明示する。

d）ウェブサイト上の情報を参照した場合は、著者＋公開年もしくは最終更新年（不明な場合はアクセスした年）＋タイトル＋ウェブサイト名（不明な場合は省略可）＋取得した年月日＋当該サイトの URL を明記する。

e）その他、表記法の細部は、以下の事例や一般学術誌の形式を参照。1 件が複数行にわたる場合には、２行目以降は全角２字分下げる。

（例）

桜井厚，2002,『インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

小林多寿子，2000,「二人のオーサー――ライフヒストリー実践と呈示の問題」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房，101–14.

Yow, Valerie Raleigh, 2005, *Recording Oral History: A Guide for the Humanities and Social Sciences*, 2nd Edition, AltaMira Press（＝ 2011，吉田かよ子監訳・訳　平田光司・安倍尚紀・加藤直子訳『オーラルヒストリーの理論と実践――人文･社会科学を学ぶすべての人々のために』インターブックス）.

Hokari, Minoru, 2002, “Maintaining History: The Gurindji People’s ‘Truthful’ Histories,” *Cultural Survial Quarterly*, 26(2): 26-27.

日本社会学会，2006,「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」日本社会学会ホームページ（2020 年 6 月 23 日取得，https://jss-sociology.org/about/researchpolicy/）.

2）文献注は、上記文献リストへの参照指示という形で記す。すなわち、本文や注の該当箇所に［著者の姓＋西暦発行年＋該当ページ］を記してリストの該当文献の参照を指示する、という形式をとる。

（例）

［呉 1997：208］

［好井・桜井編：52］

［Yow 2005=2011］　※翻訳書は［原書の出版年=訳書の出版年］

（5）執筆者の所属・身分・電子メールアドレス

文献リストのあと 1 行空けて、論文末尾に、執筆者の氏名ふりがな、所属、身分を（　　）に入れて右寄せで表記する。電子メールアドレスを入れることもできる。ただし、審査用原稿には記入しないこと。

（例）（じょは　たろう，○○大学講師 ／ joha××××@○○.ac.jp）

（6）その他

1) 他の著作物から図や表、写真を引用した場合は、出典を明記し、投稿時に著作権保持者から許可を得る。

2) 図・表は、それぞれ【図−1】【表−1】のように通し番号をつけ、タイトルをつける。なお、タイトルは、図の場合にはその下に、表の場合はその上につける。

3）アラビア数字やアルファベットは半角にする。

4）（ ）「 」『 』［ ］【 】等のかっこは全角にする。

3. その他

（1）著者校正の際には、形式上の訂正に限り、論文内容の変更は認めない。

（2）抜刷は、有料にて制作可能とする。

B・C. 研究ノート、聞き書き資料、実践報告等

1. 原稿は A4 判横書き（1 頁全角 43 字×40 行相当）で、分量は 18,000 字以内とする。

2. 書式は［A. 論文］に準ずるが、英文要旨は必要としない。

D. 書評・図書紹介

1. 原稿は A4 判横書き（全角 43 字）で、100 行程度とする。

Japan Oral History Review Author Guidelines for English Submissions

Submission of Manuscripts

1. Membership: Contributors to *Japan Oral History Review* must be a member of the Japan Oral History Association to be eligible for submitting a manuscript.

2. Manuscripts should be written in either Japanese or English.

3. The categories for submission are full research article, research report, interview transcript, book review, and publication announcement.

The guidelines for each are listed below:

(1) Research Article

1) Manuscripts should be previously unpublished work.

2) Submissions should be on A4 size paper, 40 lines per page. (English manuscripts should be in 12 -point font size; Japanese manuscripts should be 43 characters per line in 10.5- point font

size.) Manuscripts should not exceed 8,000 words double- spaced in length including the title, abstract in Japanese, keywords, headings, subheadings, notes, references, and tables. Each table and figure should count as 100 words regardless of the size. Manuscripts should be submitted in triplicate, double-spaced throughout (including footnotes and quotations), and prepared, in principle, according to *The Chicago Manual of Style*.

3) Format for the first page:

1st line: title in English (centered, can be two lines in the case of a subtitle)
2nd line:title in Japanese (centered, can be two lines in the case of a subtitle)
3rd line: ～ 6th line: blank
7th line: Japanese abstract (within ten lines)
One blank line, then three keywords (centered)
One blank line, then begin text
Below the bibliography, leave one line blank; below that, write the author's name, institutional affiliation, if any, and email address

Tables, Graphs and Photographs:

Tables, graphs and photographs should be included on the appropriate page in the manuscript. If they are taken from another publication, this should be indicated and permission should be obtained from the copyright holder.

Tables, graphs, and photographs should be numbered and titled with photograph titles below the photograph but table titles above the table.

(2) Research Report

Submissions should be on A4 size paper, 40 lines per page. (English manuscripts should be in 12-point font size; Japanese manuscripts should be 43 characters per line in 10.5- point font size.) They should be about 5,000 words.

The other format requirements are the same for a research article submission except that no abstract is required.

(3) Book Reviews, Publication Announcement

1) The submission should be on A4 size paper approximately 100 lines long.

2) The format otherwise should be the same for a research article submission except that no abstract or keywords are necessary.

Submission Procedures:

Authors should submit a Microsoft Word version of the manuscript to the e-mail address indicated on the JOHA homepage as an e-mail attachment.

Articles are subject to anonymous review and approval by the editorial board. Give your name, address and contact information (telephone number, e-mail address) on a separate title page and the abstract in Japanese (300 characters).

Book reviews, news from abroad, and other reports may be accepted if they are deemed appropriate for this journal. The decision of the editorial committee is final and irrevocable.

Copyrights
Authors publishing in the *Review* will be asked to sign an Exclusive License Form. In signing the form, it is assumed that authors have obtained permission to use any copyrighted or previously published material.

The *Review* provides offprints to the authors at her/his own cost.

2. 会員異動（2023 年 10 月 8 日～2024 年 2 月 25 日）

新入会員（入会順）

- 田中 佑典　立教大学大学院社会学研究科
- フェルナンダ・バウザッキ・ジ・モウラ・モライス　大阪大学大学院人文学研究科博士前期課程
- 須佐 淳司　就実大学経営学部　教授
- 水谷 千景　京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程
- 中村 貴　新潟国際情報大学国際学部　准教授
- 大塚 匠　会社員（サントリー食品インターナショナル株式会社）／京都芸術大学大学院芸術研究科研究員
- 石川 亮太　立命館大学経済学部　教授
- 久志 隆子　自営業（農業）
- 韓 光勲　大阪公立大学大学院文学研究科博士後期課程／日本学術振興会特別研究員（DC1）
- 相原 由奈　東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程
- 金堂 奏　一橋大学大学院社会学研究科
- 長谷川 愛　関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程
- 中野 陽子　和泉短期大学　准教授
- 小谷 英里　一橋大学大学院社会学研究科地球社会研究専攻

退会

仙波梨英子、小野寺拓也、渡辺祐介、大瀧友里奈、加藤里織

※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は事務局までご連絡ください。

（事務局　根本雅也・佐藤量）

3. 2023 年度（2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日）会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願いいたします。また、一部ですが、2022 年度・2021 年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしくお願いいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。（どの会員からの振り込みなのかを確認できないケースが相次いでいます。ご注意ください。）

■年会費

一般会員：6000 円　学生・その他会員：3000 円

＊2023 年度より一般会員の会費を 5000 円から 6000 円に値上げしました。振込の際にはご注意ください。

＊「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に振込票等にその旨明記してください。（住所・所属の変更、退会の申し出などの連絡は、振込票ではなく事務局にメールでお願いいたします。）

＊年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

＊払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

＊従来と記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店名：〇一九（ゼロイチキュウ）

店番：019

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際はご連絡ください。

その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の李（leehj(at)css.kobegakuin.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計　李洪章）

. . . . . .

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

JOHAニューズレター第45号

2024年2月27日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒186-8601 東京都国立市中2丁目1番地

一橋大学大学院社会学研究科 根本雅也 宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

＊郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊